

健常児と精神遅滞児の同一グループによるダンスセラピーの実践的研究

西 洋子・岩岡研典

研究目的

ダンスは身体運動を伴ってのみ成立する活動であり、その意味においてはヒトの身体的機能面に働きかける刺激といえる。しかしながらダンスの機能はそこには留まらず、イメージと運動の交流を通して、人間の心理的側面に働きかけ、或はノンバーバルなコミュニケーションの手段として人と人をつなぎ、豊富な運動の質やリズムを含みうる形式の柔軟さを備えている。これらはすなわち、特定化されたスポーツには多くは認められない、いわばダンスの特性と判断される。

筆者らは、これらダンスのオリジナルな価値に着目し、身体運動の側面から心身の相互的な働きをとらえるための1つのアプローチとして、精神遅滞児と健常児の同一グループによるダンスプログラムを1年に渡り継続してきた。

特に本研究においてはまずケーススタディとしての一事例を通して、ダンスプログラムを実施することでの変容を多くの視点からとらえ、療法的なこの分野の可能性と問題点、検討課題等に関する基礎的な知見を得ることを目的とする。

研究方法

対象は、精神遅滞児と診断される6歳の女兒1名である。牛島式知能検査の結果からの総合知能指数は51で、特に脳損傷を反映すると考えられる項目の成績が低い評価レベルにあった。

ダンスプログラムは1990年12月より1年間、週に1回、45分実施し、以下の点について検討した。

- (1) 動作の習得とそこに生じる問題点
(動作の多様化と洗練化の視点から)
- (2) 創造的運動の変容

結果及び考察

・ダンスプログラム時の身体活動水準

対象児の平均心拍数(132拍/分)は健常児(157拍/分)より有意に低く、動作追従や興味持続の問題などを考慮する必要があるものと思われた。

・動作の多様化、特に跳動作の発達に関して

対象児は右脳に微細損傷の疑いがあり、そのため台上からの降下やその場両足ジャンプなどの一般的な発達過程を経るのが困難であったため、何らかの迂回経路を作る必要性が示唆された。

・動作の洗練化

リズムミカルな動きに対する全身の協応はプログ

図1 動作の洗練化
(動作の協応)

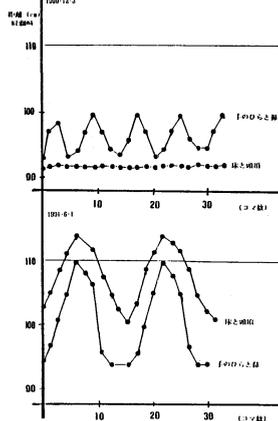
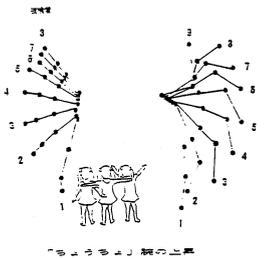


図2 動作の洗練化
(柔らかい動き)



ラムへの参加継続ともない改善され、リズムへの動作の同期が観察された(図1)。

プログラム参加当初(図2左)は上半身に過度の筋緊張が認められたため、柔らかい動きの実施に対しては直線的な動作を行っていたが、動きの提示とともにイメージをかけあわせる指導によって各セグメントの位相の異なる洗練された動き(図2右)へと改善が認められた。

・模倣の運動の変容

表1に示す通り、4つの段階の変容が観察された。

表1 模倣の運動の変容

| 年・月・日 | (模倣の運動の変容) |
|------------|--|
| 1990-12-3 | <ul style="list-style-type: none"> ・大きな声で笑いながら床を叩く音で足ぶみをしたり、腕をペタペタさせる。(床を叩くリズムとはあっていない) ・「ストップ」で片足を踏み鳴らしたり、小さなジャンプを行なう ・叩き終わると「もう一度」という風に自分で床を叩いて見せ、要求する ・「……になーれ」には全く興味を示さず、すぐに床を叩くことのみを要求してくる。 |
| 1991-2-4 | <ul style="list-style-type: none"> ・「地震だ」で揺れることにも「……になーれ」にも興味を示さず、この部分の活動には参加しないことが多くなる。 |
| 1991-6-1 | <ul style="list-style-type: none"> ・「地震だ」の時は静かに「……になーれ」で行なうものを言葉で告げにくる。 ・「ねこちゃん」「ぞう」「かげさん」…… ・「……になーれ」も自分では動かさずに立ったまま友達の様子をじっとみている。 |
| 1991-11-16 | <ul style="list-style-type: none"> ・「地震だ」で小さく揺れ、「……になーれ」も動きとしては長くはつながらないが、イメージをもったポーズはできるようになる。 ・「……になーれ」が1つ終わると次にやりたいものを告げにくる。 <p> ちょうちょ はばたきを3回 カエル ジャンプ3回 ヘビ 両手を合わせて動かす はっぱ 両腕で大きなまををつくり斜めにか ニワトリ 鳴声をまねる 虫さん 身体を小さくする </p> |